

浅野内匠頭刃傷一件

高田 友

(九)

上使の副使に多門傳八郎重共なる旗本ありき（婿養子／舊姓朝比奈）。目付に任ぜられ、七百石を給せらる。

浅野に心を寄する「甚だしきものあり、爲にその記せる「多門傳八郎覺書」（多門筆記）は事の真相と乖離するや資料として恃むに足らず。且又、己れの營爲を飾らむが爲に虚言を用ゐたりと傳へらるるは必ずしも誹謗にはあらざらむ。

正使庄田安利、庭先にて切腹せしめむとしたるに、多門、大名をして庭先にて切腹せしむるは苛酷なりとて異を立てたりとは本覺書に見ゆる所、百代に喧傳せられてあれど、一に、大名の切腹庭先にて行はしむるはさほど異例の儀にはあらず、二に、多門のこれに服さざりしとは本覺書にのみ見らるる所にして、信を置くに足らず。

浅野の辭世の歌とて知らるるは左の如し。

風誘ふ花よりもなほ我はまた春の名残をいかにとやせむ

この歌、古來、多門の創作に非ずやとの疑義あれど、豈吃驚せられざらむや、さる浮世作家の著作より採れりとの説あり。多門の爲にも浅野の爲にも惜しむべきにこそあなれ。

(十)

浅野の家中に片岡源五右衛門高房ありき。

刃傷ありと聞くや直ちに田村右京太夫の屋敷へ赴き、多門傳八郎に向ひて、尊顔拜するを許されよと申し出でたり。多門申しけらくは、聲を掛くるは許されねど、庭先に控へて内匠頭の縁先を通るを拜するには差構なし、と。

四十七士の蹶起、よつて來たる所は様々付度せられてあれど、片岡に限りていへば、私心なく、主の御爲に命捨てむとの衷心より出でたりと言ふを得べし。

さは、片岡、内匠頭の念者なりければなり。

武士は女色を卑しみ、赤心もて契らむには、男と男ならでは成り立つまじき思ひあり。

赤心もて命を主に捧げたる上は、敵を仕留めむや否やは斟酌する所にあらず。闇雲に切り込みて事ならずは割腹して果てこそ、蓮の台の上にて君に相見ゆるの顔あるべけれど思ひ定めたるなり。嗚呼、君の翼覆嫗煦いかでか忘れ得べき。

磯貝十郎左衛門また然り。

時に浅野内匠頭三十五歳。片岡源五右衛門同じく三十五歳。若き日より契りを交はし、男色に相應しき齡のほどを過ぎて容色衰へたれば、我が代人として、美童磯貝を探し出して君

に捧げたるなり。十郎左衛門は二十三歳なりき。

(十一)

片岡源五衛門および内匠頭舍弟大學長廣（内匠頭養子）、俱に大石内藏助良雄に宛てて涕の露置く水莖したためて送る。玉梓の使ひは原惣右衛門および萱野三平。彌生十四日江戸を出で、十八日赤穂に着す。早駕籠にて宿場ごとに交代すれど、惣右衛門・三平には地獄の責め苦なり。四日の間皆目寝ぬるを得ず、揺るるに由りて舌を嚙むの虞れあれば手拭ひを口に啞へ、天井より垂したる紐に縋り付きて生を全うす。

授、片岡の書翰の名高き一節を御紹介仕らむ。

折から、松の廊下に於て、吉良上野介殿、理不盡の過言を以て恥辱を與へられ、これによりて、君、刃傷に及ばれ候。

(十二)

吉良家・上杉家の續柄如何ならむ。

上野介奥方は上杉綱勝の妹なり。而して、生まれたる男子「三之助」すなはち綱勝の養子に入り綱憲と名乗る。ここに兩男子あり。綱憲の本妻は紀州徳川家の姫君（吉宗の姉妹）。男子二人いづれも側室の所生なりと推察せらる。

世に名君と知らるる上杉鷹山（一七五一生／刃傷の五十年後）は養子にて上杉家に入りたれど、その血筋を辿れば、思ひきや、女系にて上野介の玄孫（やしやご）なりしとは。

綱憲息兩人、うち、惣領吉憲、父綱憲の嗣を繼ぎ、次男義周すなはち祖父吉良上野介の養子となる。孫、祖父の爲に養子に採らるるは古來その例尠からず。

(十三)

而して、一年半の辛苦の末に、討ち入りの日の到來せり。

討入は十二月十四日と知らるるが、さは舊曆師走の儀にして、新曆にては年改まる。かかる日附は歴史の扱ひ難澁を極む。舊曆にては一七〇二年の十二月、新曆にては一七〇三年一月。さはいへど、なほ舊曆を用ゐて十二月と言はまほしきが我儕の常なり。然而、一七〇三年十二月と申せば、一年後のごとき誤解を生ぜずんばあらざるなり。かくてこそ、史家も一七〇三年とは言はで畢んぬれ。いかさま、一七〇二年十二月となむ申すべき。

加之、舊曆にては日付の改まるは深更子の刻にあらで、鶏旦なりき。十三日の夜に蕎麦を食ひて英氣を養ひ、十四日味爽に討入りたるにはあらざるなり。蕎麦を食ひたる戌の刻はすでに十四日、否、日の暮るる以前より既に十四日。討入たる寅の刻なほ十四日。拂曉上野介の首級を取り、天明漸くにして十五日となりて泉岳寺へ向ふ。

前日十四日晝は雪なりしかど、夜には風冴えて空晴れ上がり、皎々たる月の雪景色を照ら

せるなり。舊曆十四日なれば、望月の前夜とは知るべし。

（令和七年十月十五日受附）